



「見たり、聞いたり、探ったり」No.256

通算 No.407

青 木 行 雄

19歳、^{さそうゆうか}笹生優花、全米女子OP優勝(ゴルフ) (2021年(令和3)6月6日)

^{ゆうか}優花・メジャー制覇おめでとうございます。

世界的新型コロナウイルス蔓延の最中、女子ゴルフの笹生優花(19歳)が令和3年6月6日、米サンフランシスコの名門オリンピック・クラブ(6457ヤード、パー71)で開催された全米女子オープンで、メジャー初制覇を果たした。通算4アンダーで並んだ畑岡奈紗(22歳)との日本勢同士のプレーオフを制した。19歳11か月は、2008年(平成20)、朴仁妃(韓国)に並ぶ大会最年少記録である。女子日本勢のメジャー制覇は、1977年(昭和52)全米女子プロ選手権の樋口久子と、2019年(令和元)全英女子オープンの渋野日向子の制覇に続き、この笹生で女子3人目の快挙であった。



自分の打ったボールの行方を見守る真剣な眼差し。

首位のレキシ・トンプソン(米)と1打差の2位で出た笹生は2連続ダブルボギーをたたくなど序盤は苦しんだが、トンプソンがスコアを落とすのを尻目に終盤の16番から連続バーディーを取り、プレーオフへ進んだ。3ホール目をバーディーとし、畑岡を振り切って優勝したのである。とにかくすごいことだ。

「^{さそうゆうか}笹生優花」の出生・来歴について

日本人の父とフィリピンの母の間に生まれ、6歳でフィリピンから日本に移住し、小学校3年から再びフィリピンに戻った。父の影響により8歳からゴルフを始めたという。

早くからフィリピン国内や各国のジュニアやアマチュアの大会で活躍しており、2017年(平成29)までに「タイ、アマチュアオープン」2014年(平成26)で3位、「ワールドジュニアガールズ選手権」2016年(平成28)優勝、等々数回に参戦し優秀な成績を残していった。

日本勢女子の主なメジャー大会成績

1977年(昭和52)	樋口 久子	優勝	全米女子プロ選手権
84年(♫ 59)	岡本 綾子	2 位	デュモーリエ・クラシック
86年(♫ 61)	♫	2 位	♫
87年(♫ 62)	♫	2 位	全米女子オープン
♫ (♫ 62)	♫	2 位	デュモーリエ・クラシック
89年(♫ 64)	♫	2 位	全米女子プロ選手権
91年(平成2)	♫	2 位	♫
94年(♫ 6)	小林 浩美	3 位	♫
2001年(平成13)	福嶋 晃子	2 位	ナビスコ選手権
06年(♫ 18)	宮里 藍	3 位	全米女子プロ選手権
09年(♫ 21)	♫	3 位	全英女子オープン
12年(♫ 24)	宮里 美香	2 位	全米女子プロ選手権
18年(♫ 30)	畑岡 奈紗	2 位	♫
19年(令和元)	渋野日向子	優勝	全英女子オープン
20年(♫ 2)	♫	4 位	全米女子オープン
21年(♫ 3)	笹生 優花	優勝	全米女子オープン
♫ (♫)	畑岡 奈紗	2 位	♫

2015年(平成27)日本女子プロゴルフ協会(JLPGA)ツアー「サントリーレディースオープン」に初出場、以降5年連続でアマチュアとして出場、又、2017年(平成29)には韓国女子プロゴルフ協会(KLPGA)にも初参加、2018年(平成30)には「アジア競技大会」にも出場、団体・個人共に数個の金メダルを獲得している。

2019年(令和元)11月、JLPGA プロテストで18位タイで合格し、2020年(令和2)JLPGAに入会92期生となった。

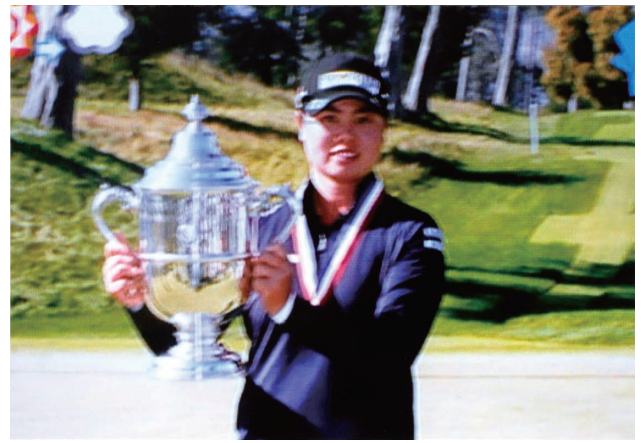
2020年(令和2)8月16日、NEC軽井沢72ゴルフトーナメントで優勝、女子ゴルフで初の21世紀生まれの優勝者となった。

2020年(令和2)8月27日、ニトリレディースゴルフトーナメントで優勝。この月2回もの優勝で花をそえた。

2021年(令和3)3月に代々木高等学校アスリートゴルフコースを卒業、同年に日本女子と全米女子プロゴルフ(LPGA)ツアーの試合に掛け持ち出場する形を採った。そして6月にはLPGA公式戦である全米女子オープンに出場、大会では2日目に単独首位、3日目にスコアを落とし首位と1打差の2位に下がり、最終日も2、3番ホールで連続ダブルボギーとなるなどスコアを落としたものの-4(69-67-71-73=280)で終え、同スコアで首位に並んだ畑岡奈紗とのプレーオフではまず9番ホールと18番ホー



優勝カップを前にはれたい優花の顔。念願がなかった最高の笑顔のようだ。



ゴルフ場内で優勝カップを手に満悦の優花。

ルの2ホールのスコアトータル方式で行われ、両者ともイーグルで終了。2周目からは^{*}サドンデス形式となり2回目の9番ホールで畑岡がバーディーパットを外した後、笹生がバーディーパットを決めて畑岡を振り切り、LPGA ツアー初優勝をメジャー大会制覇で飾ったのである。同大会の優勝者としては朴仁妃(大韓民国)と並ぶ19歳11ヶ月17日での史上最年少優勝、日本人女子ゴルファーとしては樋口久子(1977年(昭和52)全米女子プロ)、渋野日向子(2019年(平成31)全英女子オープン)に次ぐ史上3人目。またフィリピン国籍を持つ女子ゴルファーとしては史上初のLPGA メジャー大会制覇となったのである。

^{*}サドンデス形式=どちらか一方が相手よりいいスコアでホールを終了した時点で優勝がきまる方式。

名 前 笹生優花
 生年月日 2001年(平成13)6月20日
 身 長 166cm
 体 重 63kg
 国 籍 日本、フィリピン
 出 生 地 フィリピン、ブラカン州サン・イルデフォンソ
 出 身 地 日本、東京都
 出 身 校 代々木高校(東京都)
 得意クラブ ドライバー
 好きな食べ物 肉

フィリピン出生、東京都出身の女子プロゴルファー、代々木高等学校アスリートゴルフコース卒業で、日本での所属は扶桑カントリー倶楽部

笹生の心境について

涙「信じられない」と本人の言葉。

ウイニングパットを沈めた笹生はガッツポーズをつくった。畑岡と抱き合い、祝福のウォーターシャ

ワーを浴びて歓喜に浸った。

「夢は世界一になることと全米オープンで優勝すること。本当に今週できるなんて信じられない」。メジャー初の日本勢同士によるプレーオフの末、世界最高峰の大会を史上最年少で制した19歳は涙を拭った。

一打差の2位で出たが、2、3番の連続ダブルボギーで首位と5打差に、5番で最大6打差まで広がった。過去40年、最終日に複数回ダブルボギー以上を叩いた勝者はいない。

「動揺した。苦しいラウンドになると覚悟した」。しかしキャディーに「まだホールはある。自分を信じろ」と激励され切り替えた。「短いパー5があるので何とかできると信じていた」。狙い通りパー5の16、17番で連続バーディーを奪い生き残った。



優勝式で「信じられない」と涙しながら、日本語と英語で、インタビューに応じた優花の涙ぐむ容姿。



ドライバーショットの容姿。いかにも飛距離が安定した立姿である。



キャディーのアドバイスも受けながら、1打1打慎重に進行の様子がうかがえる。



得意のドライバーを打って行末を見る優花。ドライバーの飛距離262ヤードは日本ツアー1位を誇るという。



メジャー最終のパット。日が落ちてグリーンに慎重な影が映る。この一打が100万ドルになるか。



ドライバーのスイングに遠飛距離の姿が感じられる。優勝するドライバーショットである。



新型コロナ禍の中、観客も少ないようだが、優勝賞金、100万ドルは別格である。ナイスショットの音が聞こえる。

プレーオフ直前、腹痛に見舞われたが、バナナを食しながら臨んだ。合計スコアで争う2ホールをバーで切り抜け、サドンデスとなった3ホール目にバーディーで決着をつけた。

3歳上の畑岡は米国、笹生は日本を主戦場としているが、実はジュニア時代からのライバルである。2016年、世界ジュニアで優勝をさらわれている。同年の全米女子アマチュア準々決勝では1アップで勝利した。そしてこの大舞台では歴史に残る激闘を演じ勝ち取ることが出来た。

彼女は飛距離が最大の武器である。平均飛距離262ヤードは日本ツアー1位を誇っている。13歳の時、米国の試合で17歳の選手に約50ヤード後れを取り、「来年は同じように飛ばせるようになりたい」と号泣したという。足に2キロの重りをつけて100メートル、50メートルダッシュを各10本、反復横跳び30分、30キロのバーベルを担いでスクワット、独特のトレーニングで体を鍛えたという。メジャー4勝の小柄な飛ばし屋ロリー・マキロイ（英国）の動画を見て軸のぶれないスイングを習得した。飛距離は1年で30～50ヤードずつ伸びたという。築き上げた力強いスイングはオリンピック・クラブの深いラフも苦にできなかったようである。

日本とフィリピンの二重国籍を持つ彼女は、今回の東京五輪にはフィリピン代表として戦うようであるが、将来的には日本国籍選択を視野に入れているようである。

2020年の米ツアー出場予選会では落選したが、この優勝で5年間出場資格を獲得した。

1946年（昭和21）終戦後まもなく始まった、女子ゴルフのメジャー大会、会場は毎年変わり、第76回の今年は名門中の名門、オリンピッククラブで開催された。2014年（平成26）から米国以外でも最終予選を行うことになった。今年は日本勢11人が出場した。渋野日向子、勝みなみ他は予選落ちとなる。優勝者には10年間の同大会の出場権が出来る。又、他メジャー4大会の出場権は5年間有する。

2020年（令和2）に心臓発作で亡くなったツアー通算82もした、ミッキー・ライトにちなんで「ミッキー・ライトメダル」などが与えられるという。

そして賞金は100万ドル（日本円で約1億1000万円）の受賞である。

日本での笹生の指導者、ジャンボ尾崎こと尾崎将司の祝言葉。

「今回の優勝は彼女の育ってきたつらい環境をばねにした“何くそ精神”のたまものであると思う。努力しかないことを一番理解し、頑張ってきた成果でもある。本当におめでとう。また、敗れた畑岡選手にも最大の賛辞を贈りたい。素晴らしい2位だったと思う」。

もう少々本人のことについて記してみたい。

この優勝は家族一丸でたどり着いた頂点だと思う。笹生は誇らしげに、父・正和さん(63)と一緒に優勝カップを掲げた。会見では涙ながらに、感謝の言葉を口にしたという。

「緊張したけど、お父さんも友達もキャディーもずっと一緒にいてくれた。支えてくれた家族がいなかったら、私は今ここにいなかった」

8歳のとき、自宅で父と「全米女子オープン」をテレビ観戦していた。その時、ポーラ・クリマー(米国)の姿に憧れ「ゴルフをやりたい。世界一になりたい」と本気で父に懇願したという。この本気度を確認した父・正和さんは考えてプレー代の安さや、都市部からゴルフ場が近いことなど、練習環境のよいフィリピンへの移住を決断した。母・フリッツィーさん(44)の母国でもあった。

両足首に2キロずつの重りをつけて走ったり、サンドバッグをたたいたり、厳しい指導で体を鍛えてきた。そのトレーニングは今も続けているという。現在は東京都内の自宅から、母が好きだという神社仏閣を目標に、重りをつけて歩く。そこに長い階段があれば、格好のトレーニング場所になる。品川神社は階段の上り下りが好場所のようだ。最近は強度もアップし、胴体に10キロの重りをつけてきたえながら、身長166センチ、体重63キロの屈強にして、飛距離262ヤードもとばす柔軟な体を築かれてきたのである。

彼女は、流暢に3ヶ国語を、英語と日本語でインタビューに応じ、フィリピン・タガログ語も操る。本人は日本とフィリピンの両国にルーツを感じているが苦労もあったようである。父・正和さんは「フィリピンだとハーフの日本人と扱われる。日本では日本に来るなよ、とか言う子もいた」と明かしているが目標を見失わず鍛錬を続けて来た。



父・正和さん(63)と愛娘・優花の2ショット。正和さんの夢を実現した最高の親孝行。



先輩の宮里藍さんと2ショット。彼女もがんばったがメジャーは優勝出来ていない。

8歳で掲げてきた目標を、家族とともに19歳で実現した。その夢はさらにこれから広げ続ける事と期待したい。

東京五輪ではフィリピン代表として出場がきまったようだが、いずれ本人も日本国籍に移行の考えのようである。

がんばれ。4メジャー大会へ優花。

参考資料

日経新聞

讀賣新聞

サンスポ

NHKテレビ

2021年6月26日記

